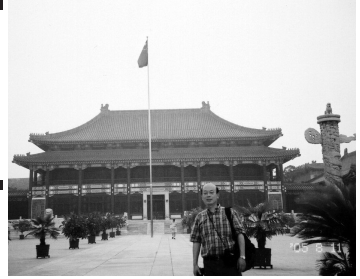


## 中国図書館探訪記

# —国家図書館分館—

中国語学科 竹内 誠



今回は、国家図書館分館を御紹介する。前稿で述べたとおり、本館とはまったく別のところにある。北京市のほぼ中心にあるとあって差し支えない。すぐ東となりが北海公園で、シンボルの白塔が見える。図書館の前を通る文津街を、東に徒歩で15分ほど行けば、故宮博物院の北門と景山公園の正門に至るので、文化的雰囲気をも十分に堪能できる環境にあるといえよう。堂々たる正門には「北京市文物保護単位 北京図書館主楼」のプレートが掲げられている。入ると、大きな前庭になっていて、「文津閣」という扁額のかかる伝統的な建物が正面に鎮座する(写真)。門衛を勤めるガードマンを除いてほとんど人通りはない。階段はまんなかに龍のレリーフをはさむようになっていて、故宮や天壇の建築物と見紛うほどで、入ろうとする者を尻込みさせるに足る貫禄である。館内に入ると、受付で手荷物を預かる所になっている。本館同様0.5元の有料。図書館のなかに持ち込めるものといえば、筆記具と相場は決まっているが、中国では、それ以外に、閲覧室の入り口までなら、持ち込みを許可されるものがあるが、おわかりであろうか。閲覧室の入り口の棚に、ペットボトルがところ狭しと並べてあるのを初めて見たときの異様な光景を今でも覚えている。(インスタントコーヒーの瓶に似た)水筒やペットボトルの持ち込みは、合法的なのである。閑話休題。正面の階段を二階に上がると、そこがお目当ての普通古籍閲覧室。入り口で、本館共用の閲覧カードを提示し、しかるべき手続きが必要。驚いたのは、氏名、所属単位のほかに専攻分野を書かされたことである。見れば、利用者のほとんどが、プロやアマの研究者、大学院クラスの学生とおぼしいので納得。この分館は、基本的に辛亥革命(1911年)以前に上梓された(但し、一部複製本も含む)書籍を所蔵し、専門性がきわめて高い。持参のボールペンで申請書に書き入れようとすると、ここでは万年筆、ボールペンは使用禁止といわれ、かわりに鉛筆を渡される。貴重書に書き込みされるのを防ぐためかと思われる。閲覧か、と尋ねられ、そうだと答えると、二枚の閲覧申込書をくれる。つまり、一度に二種類(二冊ではない)しか貸し出さないというわけだ。番号のはいったプラスチックの札をもらい、請求した本を待つことになる。閲覧室自体はさほど広くないが、調度品つまり、書架や机、椅子、電気スタンドすべてがアンティーク調で趣に富む。室内は、やや薄暗く、閑静で、落ち着いた雰囲気である。おまけに窓外より北海公園が望める。請求した本がワゴンで運ばれて来ると、件の番号で呼ばれる。だいたい20分から30分待つことになる。テキストのスキャナーコピーは可能であるが、当該テキストの三分の一までと決められている。けれども三分の一を三回に分けて、全テキストをコピーしたが、別に咎められることがなかったので、果たして意味があるのだろうか、とってしまう。面白いのは、テキストの出版年代によって複写の値段が変わることだ。複写のテキストが、いつごろのものかと聞かれ、民国(20世紀)初期だ、というと、だったら、一枚につき4元という答えが返ってきた。ある日のこと、調べ物が終わり、図書館をあとにし、文津街に出た。すでに陽が西に傾き、北海公園のほうを、ふと眺めると、夕陽が白塔を美しくに染めあげていた。行くだけでも価値のある図書館だと思うが、いかがだろうか。

たけのうち まこと(教授・中国文学)